

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 30 日現在

機関番号：12101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24531099

研究課題名(和文)外国語活動に関する児童の好き嫌いの度合いと学級担任の満足度

研究課題名(英文) Student attitudes toward and HRT satisfaction with foreign language activities

研究代表者

猪井 新一 (INOI, SHINICHI)

茨城大学・教育学部・教授

研究者番号：80254887

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：茨城県内の公立小学校8校(児童1524人、指導者46人)に協力をいただき、授業参観ならびに、外国語活動に関わるアンケート調査を実施した。主に5,6年生の児童及びその学級担任のデータを分析、両者の相関関係の有無を分析した。結果、児童の外国語(英語)や英語授業の好意度、英語学習意欲、活動に対する自信の程度、及び学級担任の英語や英語授業の好意度、満足度、英語教員免許有無の有無等の間には何ら関係性はみられなかった。これはTTによる外国語活動の授業において、ほとんどのHRTが主指導者として授業を展開していないことによるものである。

研究成果の概要(英文)：The study tries to examine if there is a relationship between homeroom teacher(HRT) factors (i.e., English teaching license and teacher attitudes toward English and English lessons) and student factors (i.e., student attitudes toward English and English lessons, student English learning motivation, and student confidence in doing various English activities) in primary schools in Japan. Correlational analyses were performed between HRTs' and students' responses to questionnaires. Results showed that none of the HRT variables were statistically correlated with any of the student variables examined. The findings were discussed in terms of the nature of teacher roles in team-taught English lessons: the HRT usually played a supporting role rather than the leading role in TT English lessons.

研究分野：英語教育学

キーワード：外国語活動 小学校 英語 学級担任 授業好意度 学習意欲 英語教員免許 時間数

1. 研究開始当初の背景

平成 23 年度から必修化された小学校外国語活動を成功させるためには、指導者である学級担任と授業を受ける児童がともに、外国語活動を通して英語が好きになり、満足感や充実感を得ることが必須である。外国語活動は 1998 年の学習指導要領の改訂により総合的な学習の時間の中で、国際理解教育の一環として始まった経緯があり、外国語活動指導形態は各市町村、各小学校ごとに様々な実態がある。茨城県内においても、年間指導計画及び授業案の作成者は市町村教育委員会、学級担任、外国語担当日本人教師、ALT 等と市町村によってまちまちである。同様に、外国語活動の主たる指導者も、学級担任、外国語担当日本人教師、ALT と様々である。使用する教材も、「英語ノート」、学校独自の教材、市で統一した教材と様々である。外国語活動内容も、英会話を中心とした英語の聞く・話すことのスキルの養成を中心としたものや、漢字を含め日本語活動も取り入れながら広く言葉の学習をするものもある。ある意味では、外国語活動の計画・実践は、依然として各々の市町村・小学校の独自性に委ねられていると言っても過言ではない。

2. 研究の目的

本研究の目的は、上記のような外国語活動の実態を踏まえ、児童の英語及び外国語活動授業好意度や学習意欲等及び学級担任の外国語活動好意度・満足度は、どのような要因と強く結び付いているのかを、外国語活動の指導形態や学級担任の英語力も含め、様々な要因から分析することである。とりわけ、児童の外国語活動および英語好意度と学級担任の英語や外国語活動に対する態度や授業満足度との相関関係の有無も調査することである。

3. 研究の方法

(1) アンケート作成

小学校外国語活動に関する文献検索、先行研究分析を行い、児童用及び教師用アンケートを作成した。

児童用アンケート

外国語活動の授業の最後の 5 分程度で回答できるように、次の 5 項目(Q1~Q5)を作成した。Q2~Q5 の項目に関しては 4 段階(例(Q2) 4. とても好きである 3. まあまあ好きである 2. あまり好きでない 1. まったく好きでない)で回答してもらった。

Q1. 英語教室通学の有無および開始時期

Q2. 外国語(英語)好意度, Q3. 学校の英語授業好意度, Q4. 英語学習意欲の程度, Q5. 7 つの活動(挨拶, 歌を歌う, 月・曜日・動物の名前を言う, ゲーム, ALT の英語の理解, クラスメイトとの会話やインタビュー, 人前で英語を話す)に対する自信度

教師用アンケート

教師用アンケートは、計 20 項目ある。その内訳は次の通りである。

Q1. 担当学年クラス, Q2. クラスの人数,

Q3. 外国語(英語)活動担当年数, Q4. 中学校英語教員免許の有無, Q5. TT 授業実施頻度, Q6. 学習指導案の主な作成者, Q7. 授業の主な指導者, Q8. ALT との打ち合わせ, Q9. ALT の雇用形態, Q10. TT における指導者の役割項目, Q11. 外国語(英語)の好意度, Q12: 外国語活動の授業好意度, Q13: 外国語活動に関する校内外の研修への参加の頻度, Q14-a: 英語への慣れ親しみの程度, Q14-b: 外国語や異文化への関心の程度, Q14-c: 英語コミュニケーション能力向上の程度, Q14-d: 外国語活動への関心・必要性の認識の高まりの程度, Q14-e: 外国語活動指導力の向上の程度, Q14-f: 他教科の指導力の向上の程度, Q15: 外国語活動の満足度, Q16: 外国語活動の課題

Q11, Q12, Q14-a~f および Q15 に関して、児童用のアンケートと同じように、4 段階(4~1)で回答してもらった。教師用アンケート項目の Q11 と Q12 は、児童用アンケート項目 Q2 と Q3 にそれぞれ対応している。

(2) 訪問する小学校選定のための情報収集

主に、小学校現職教員(茨城大学教育学部卒業生、内地留学生等)への問い合わせを通して行い、授業見学及び授業録画、アンケート調査実施を依頼した。協力依頼をしたとしても、断られる場合があり、協力依頼学校を探すことに、相当の時間を費やした。さらに、協力をいただいた小学校は、結果的にはほとんどが ALT 主導型の学校となり、学級担任主導型の学校は、ほとんどなかった。

(3) 研究協力校(児童及び教師)

最終的には、茨城県内の公立小学校 8 校の児童 1,524 人および外国語活動担当者(学級担任 HRT43 人、外国語活動担当教師 JTE3 人)に、本研究に協力していただいた。その内、児童は主に 5, 6 年 979 人、その HRT43 人から得られたデータを中心に分析を行った。本研究には ALT は含まれていない。

(4) アンケート調査結果

児童回答

Q1. 児童(5, 6 年生)の英語教通学の有無

表 1 は 5, 6 年生児童を一緒にし、学校ごとに英語教室通学有無を調査した。結果、学校と英語教室通学の有無には関係があった($\chi^2=22.22, df=7, p<.01$)。学校 A, B, C, H は英語教室通学有の割合は 3 割前後あるが、学校 E, F, G の 3 校はその割合が多くても 1 割 5 分程度である。F 校にあっては 1 割程度

表 1 学校と英語教室通学の有無(%) * : 欠損値 3

学校	英語教室通学		合計
	有	無	
A	35.7	64.3	129
B	29.5	70.5	78
C	27.1	72.9	328
D	23.3	76.7	30
E	13.6	86.4	81
F	11.5	88.5	52
G	15.4	84.6	13
H	31.3	68.7	265
合計	267	709	976

である。地域的な影響があるのかもしれない。英語教室通学開始時期

267 人の児童が英語教室に通学しているが(表1),その通学開始時期を調査した。一番多いのが小5年生で,外国語活動が学習指導要領で正式に開始される学年である。次に多いのが,幼稚園・保育園(59人)で,全体の約2割を占めていた。その59人のうち48人(81.4%)は小学校B,C,H3校の児童である。これら3校はいずれもM市にあり,小学校1年生から年間30時間単位の英語授業を開始していることによるものと思われる。

表2 英語教室通学開始学年

英語教室通学	人数	%
幼稚園・保育園	59	22.3
小1	26	9.8
小2	11	4.2
小3	30	11.4
小4	54	20.5
小5	65	24.6
小6	19	7.2
合計	264*	100

*: 欠損値3

Q2. 外国語(英語)好意度

表3にあるように,8割弱の児童が外国語に対し好意的であり,否定的に回答しているのは2~2.5割程度である。

表3 外国語(英語)好意度(%)

	5年	6年	合計
とても好き	24.5	28.2	26.5
まあまあ好き	49.9	50.4	50.2
あまり好きでない	19.9	16.5	14.1
まったく好きでない	5.7	4.9	5.3

Q3. 学校の英語授業好意度

5年生,6年生とも8割程度の児童が学校の英語授業に対し好意的であるが,2割前後が否定的である。6年生の方が5年生より多少否定的な態度を示す割合が増えている。

表4 学校の英語授業好意度(%)

	5年	6年	合計
とても好き	35.2	27.8	31.2
まあまあ好き	49.3	51.9	50.7
あまり好きでない	11.7	16.2	18.0
まったく好きでない	3.8	4.1	3.9

Q4. 英語学習意欲の程度

5年生,6年生ともほぼ同じような傾向を示している。英語学習意欲を示す割合は8割程度で,2割前後があまり意欲を示していない。多少,6年生の学習意欲が5年生よりも下がる。

表5 英語学習意欲の程度(%)

	5年	6年	合計
とてもしたい	31.4	29.1	30.2
まあまあしたい	49.9	49.9	49.9
あまりしたくない	14.5	16.8	15.7
まったくしたくない	4.2	4.2	4.2

Q5. 7つの活動に対する自信度

表6は7つの活動々々に対する児童の自信度を示している。「挨拶」「ゲーム」は9割程度の児童が自信を持っているが,「人前で話す」活動が児童の自信度が一番低い。

表6 7つの活動に対する自信度

	よくできる	大体できる	あまりできない	全然できない
挨拶	54.5	35.1	7.9	2.6
歌	26.7	44.6	22.5	6.2
月・曜日・	37.7	41.1	16.5	4.5
ゲーム	51.7	36.8	8.6	2.8
ALTの理解	19.8	48.3	24.5	7.4
イリュージョン	30.2	40.8	20.5	8.5
人前で話す	14.7	35.6	33.2	16.5

教師回答

クラス児童の回答との関係を見るために必要と思われる教師回答のみを示す

Q4. 中学校英語教員免許の有無

JTEは当然ながら3人と全員中学校英語教員免許を所有している。HRTは11人が英語の教員免許を所有している。

表7 HRTの中学校英語教員免許の有無

	HRT	JTE	合計
有	11	3	14
無	32	0	32
合計	43	3	46

Q6. 学習指導案の主な作成者

誰が主となって,外国語活動の学習指導案を作成するかに関しては表8の通りである。「その他」の割合が一番多いが,具体的には,市教育委員会が作成した年間カリキュラムを基に,学年の外国語活動担当教師やJTEが毎回の学習指導案を作成したりすることを示している。言い換えれば,HRTが学年の外国語活動担当でなければ,学習指導案作成には関わらないことを示している。

表8 学習指導案の主な作成者

主な作成者	人数	%
HRT	10	21.7
ALT	10	21.7
両方	7*	15.2
その他	19	41.3
合計	46	100

*: 7の内訳は,HRT+ALT=5, JTE+ALT=2

Q7. 授業の主な指導者

誰が主となって,外国語活動の授業を普段展開するかについては,表9の通りである。今回の調査では圧倒的にALTが中心となっている。「その他」は,JTEが中心となり授業を進めている。

表9 授業の主な指導者

主な指導者	人数	%
HRT	1	2.2
ALT	35	76.1
両方	8*	17.4
その他	2**	4.3
合計	46	100

*: 「両方」の内訳は,HRT+ALT=6, JTE+ALT=2, **: JTEが主な指導者

Q11. 外国語(英語)好意度

指導教師の外国語(英語)の好意度は,表10の通りである。英語に対し否定的な態度を示す割合が35%程度もある。今回の調査ではその理由を聞いてはいないが,英語そのものや英語の発音に対する苦手意識,自信のなさ

などが以前の調査からわかっている。

表 10 外国語（英語）好意度

	人数	%
とても好き	11	23.9
まあまあ好き	19	41.3
あまり好きでない	15	32.6
まったく好きでない	1	2.2
合計	46	100

Q12. 英語授業好意度

表 11 のように、11 人（約 2.5 割）の教師が授業に対し否定的な態度を示している。この割合は、若干大きいと思われる。英語授業はほとんど IT で実施され、表 8, 9 にある通り ALT が中心となって授業の計画・実施をしていることを考慮すると、授業に関わる負担自体は HRT にとってはさほど大きくないと思われる。しかし、教師自らが英語に対し苦手意識を持っていれば、教師自らが授業案を作成し、直接指導することはなくても、当然ながら英語授業に対し消極的、否定的になっているものと考えられる。

表 11 英語授業の好意度

	人数	%
とても好きである	11	23.9
まあまあ好きである	24	52.2
あまり好きでない	10	21.7
まったく好きでない	1	2.2
合計	46	100

Q15. 外国語活動の満足度

9 割近くの指導者が外国語活動に満足している（表 12）。これは、児童の約 8 割が外国語活動の授業を好きである（表 4）と回答していることによるものであろう。また、表 8, 9 にある通り、ALT が中心となって授業の計画・実施を進めており、HRT 及び JTE は、準備を含めてさほど負担感を感じていない可能性があり、指導教師の外国語活動の高い満足度に寄与した可能性がある。

表 12 外国語活動の満足度

	人数	%
とてもそう思う	2	4.4
まあまあそう思う	38	84.4
あまりそう思わない	5	11.1
まったくそう思わない	0	0
合計	45	100

△: 欠損値 1

4. 研究成果

これまでは児童（主として、5, 6 年生）及び指導教師のアンケート結果を、主として単純な度数分布等によって示した。今度はアンケート項目回答間の関連性を分析する。

(1) 児童のアンケート項目回答間の分析

英語教室通学の有無と Q2～Q5 との関連性

次の表 13 の数値は、英語教室通学の有無による 2 グループの Q2～Q5 への回答の平均値及び 2 グループ間の差を示している。例えば、Q2「外国語（英語）好意度」に関して、英語教室通学有のグループの回答の平均値は 3.33 であり、英語教室通学無のグループの回答平均値 2.84 よりも .49 高いことを示している。いずれの項目において、英語教室通

学有のグループが通学無のグループを平均値において上回り、その差は統計的にも有意であった。2 グループ間平均値の差が最大な項目が Q5-c「月・曜日・動物の名前を英語で言う」活動に対する自信度であり、最小は Q3「英語授業好意度」であった。

表 13 英語教室通学の有無と Q2～Q5 の回答

	英語教室通学		
	有	無	差
Q2. 外国語（英語）好意度	3.33	2.84	.49***
Q3. 英語授業好意度	3.24	3.04	.20***
Q4. 英語学習意欲	3.30	2.97	.33***
Q5 -a. 挨拶	3.66	3.32	.34***
-b. 歌	3.19	2.82	.37***
-c. 月・曜日・動物の名前を言う	3.52	2.96	.59***
-d. ゲーム	3.59	3.30	.29***
-e. ALT の理解	3.15	2.68	.47***
-f. インタビュー	3.24	2.81	.43***
-g. 人前で話す	2.87	2.35	.52***

Mann-Whitney U, 両側検定, ***: $p < .001$

Q3 に関して、両グループの差があまりない。Q5-c や Q5-g のような活動は英語を話すスキルを必要としており、英語教室通学有の児童は、通学無の児童よりも自信度が高い。

Q2, Q3, Q4 及び Q5 の回答の相関関係

5, 6 年生児童全体の Q2, Q3, Q4 及び Q5 への回答間の相関関係を調査した。以下は児童の回答の単相関行列である。Q5 に関しては、各児童の 7 つの活動に対する自信度の平均値を算出し、他の項目との相関係数を測定した。これら 4 項目への回答間で、中程度の正の相関関係が見られた。言い換えると、外国語の好きな児童は、英語授業が好きであり、英語学習意欲があり、活動に対する自信度も高い傾向にある。また、その逆も言える

表 14 児童の Q2～Q5 の回答の単相関行列

	Q2	Q3	Q4
Q2. 外国語の好意度			
Q3. 英語授業の好意度	.598**		
Q4. 英語学習意欲	.711**	.691**	
Q5. 活動自信の平均値	.553**	.488**	.520**

Pearson, 片側検定 ** : $< .01$

(2) 教師のアンケート項目回答間の分析

英語教員免許の有無と Q11～Q15 の関連性

Q11～Q14-d までは、英語教員免許有無による 2 グループ間の差が大きく、統計的にも有意であった。特に、Q11 と Q12 における 2 グループ間の差がとて大きい。英語教員免許所有者は、これまで英語に慣れ親しみ、相当の時間英語にふれているため、当然の結果と言える。一方、Q14-e～f および Q15 に関しては、2 グループ間の差は極めて小さく、統計的にも有意ではなかった。

表 15 中学校英語教員免許の有無とQ11~Q15の回答

	中学校英語教員免許		差
	有(N=14)	無(N=32)	
Q11. 外国語(英語)好意度	3.57	2.56	.70***
Q12. 英語授業好意度	3.64	2.69	.95***
Q14-a. 英語への慣れ親しみ	3.21	2.69	.52**
-b. 外国語・異文化への関心	3.43	2.66	.77***
-c. 英語コミュニケーション能力向上	2.79	2.34	.45*
-d. 外国語活動への関心・必要性	3.43	3.03	.40*
-e. 外国語活動指導力の向上	2.36	2.22	.14
-f. 他教師指導力の向上	2.14	2.00	.14
Q15. 外国語活動の満足度	2.93	2.94	.01

Man-Whitney U, 両側, * p < .05, ** : p < .01, ***: p < .001

指導教師のQ4, Q11, Q15への回答の単相関行列

表 16 は、指導教師の Q4, Q11, Q15 への回答の単相関関係を示している。中学校教員免許の有無(Q4)、外国語(英語)好意度(Q11)、英語授業好意度(Q12)は互いに相関関係にあることがわかり、表 15 を裏付けている。一方、教師の外国語活動満足度は他のいずれの項目とも相関関係は見出せなかった。これは表 12 にある通り、9 割近くの教師が満足度に対して肯定的に回答していることによるものである。

表 16 指導教師の回答の単相関行列(N = 46)

	Q4	Q11	Q12
Q4			
Q11	.583***		
Q12	.597***	.698***	
Q15	-.008	.114	.148

Pearson, 片側, ***: p < .001 Q4. 中学校英語教員免許の有無, Q11. 外国語(英語)好意度, Q12. 英語授業好意度, Q.15 外国語活動満足度

(3) 主指導者の違いによる児童および教師の態度

今回調査したクラス 32 クラスのうち、HRT が主となって授業を進めていたクラスはわずか 1 クラス、ALT が主指導なものは 29 クラス(全体の 90.6%)、JTE が主指導は 2 クラスであった。児童及び教師の回答項目に関し、誰が主指導であるかによって回答に異なる傾向にはなかった。

(4) 児童と HRT の回答の相関関係

児童及び指導教師間の相関関係の有無を調査する。この分析では、指導者は児童の HRT に焦点を当てる。そのため、3 人の JTE は分析対象外である。さらに、C 校の 5 年生 4 クラス及び F 校の 2 クラスは、HRT が授業に関与していないので、分析対象外とする。また、

C 校の 6 年生 1 クラスの HRT からデータを得ることができなかったために、そのクラスも分析対象外とし、最終的には 5 年生 9 クラス及び 6 年生 16 クラス、計 25 クラスの HRT 及びその児童のデータの相関を調査する。児童のデータは、クラスごとのアンケート項目への回答の平均値を算出した。調査項目は、児童の場合、外国語好意度(S-Q2)、英語授業好意度(S-Q3)、英語学習意欲(S-Q4)、活動の自信度(S-Q5)の 4 項目である。S-Q5 に関しては、7 つの英語活動各々に対する自信度ではなく、7 つの活動に対する自信度の平均値を算出している。まず、個人の 7 つの活動の自信度の平均値を算出し、そしてクラス平均値を算出した。HRT は、英語教員免許の有無(H-Q4)、外国語好意度(H-Q11)、英語授業好意度(H-Q12)、授業満足度(H-Q15)の 4 項目である。さらに、年間の授業時数を要因として加えた。授業時数は学校訪問をした時に、授業担当者から直接伺っていた。今回の調査では 8 校から調査に協力していただいているが、B, C, H の 3 校(表 1)は英語教育特区にある M 市に位置し、いずれの学校でも 5, 6 年生で、年間 50 時間単位の外国語活動の授業を実施していた。他の 5 校は学習指導要領の通り年間 35 時間単位である。児童と HRT の英語や授業への態度の相関関係を調査するために、教師自身の変化(Q15)については、分析対象外とした。

表 17 は 25 クラスの各クラス児童の 4 項目への回答の平均値、各々の担当クラスの HRT の回答、及び授業時数の単相関行列表である。この表から、以下のようなことが読み取れる。

HRT の英語教員免許有無(H-Q4)は、児童の外国語好意度(S-Q2)や英語授業好意度(S-Q3)、英語学習意欲(S-Q4)、活動への自信(S-Q5)のいずれとも相関関係は見いだせなかった。英語教員免許有無は、HRT 自身の外国語や英語授業の好意度には影響を与えているが(表 16)、児童の英語学習の情意面に

表 17 児童及びHRTの回答の単相関行列表

	H-Q4	H-Q11	H-Q12	H-Q15	時数
S-Q2	.212	.169	.090	.049	-.007
S-Q3	-.037	.171	.230	.124	-.086
S-Q4	.035	.123	.167	.082	-.055
S-Q5	-.161	-.175	-.108	-.001	.519**
時数	-.011	-.368*	-.170	-.450**	

S=Student, H=Homeroom teacher, Pearson, 片側, *: p < .05, **: p < .01,

は何ら影響を与えていないのである。これは大変興味深い。ほとんどの HRT は TT において、自らが主となって授業を展開せず、ALT のサポート役を演じているため、HRT の英語教員免許有無は児童にとって、さほど重要ではないと思われる。その結果、HRT の英語教員免許の有無は、児童の外国語や英語授業の好意度、英語学習意欲、活動への自信と何

ら関係がないと考えられる。

HRT の外国語活動の満足度 (H-Q15) は、児童の回答のいずれとも関係はなかった。唯一関係があった要因は、英語授業時数である。外国語活動の授業時数が増えると、HRT の満足度の下がる傾向にある ($r = -.450$)。もちろん、HRT の外国語活動の満足度には、授業時数以外に、児童の要因も含め他の様々な要因が絡んでいることは確かである。

外国語活動の授業時数は、児童の活動への自信度 (S-Q5) と中程度の正の相関関係 ($r = .519$) が見られた。英語教育特区のように授業時数が多いと、英語活動に対する自信度が高い傾向にあることを示している。これは授業時数が多ければ、それだけ多くの時間、英語にふれることになり、慣れ親しむ機会が多くなるため、活動に対する児童の自信度も高まる傾向になることを示している。しかし、それ以外の児童の英語や英語授業の好意度とは、まったく相関関係は見られなかった。

授業時数は、HRT の外国語 (英語) の好意度 (Q11) 及び満足度 (Q15) と弱～中程度の負の相関関係 ($r = -.368$ 及び $r = -.450$) が見られた。外国語活動の授業時数が増えれば、IT の授業において直接英語の指導をすることはしないにしても、HRT にそれだけ精神的負担感を与え、結果として、英語が嫌いとなり、授業満足度が減少する傾向が多少あると思われる。もちろん、わずか 25 人の HRT のデータであるので、一般化は危険である。ただ今後、外国語活動の授業時数の増加が予想されるが、HRT の立場からはかなり慎重に議論を進めなければならないことがわかる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 6 件)

猪井 新一: 「英語教育特区への小学校早期英語教育の導入から学べるもの」『茨城大学教育学部紀要 (教育科学)』第 65 号, (2016, 印刷中), 査読無。

猪井 新一: 「児童が好む英語の授業とそうでない授業の質的分析」『茨城大学教育実践研究』第 34 号, pp. 69-80, (2015) 査読無. http://center.edu.ibaraki.ac.jp/doc/kiyou/34_2015/2015_069_080.pdf

猪井 新一: 「小学校英語に対する学習者の態度は中学校で変化するのか」『茨城大学教育学部紀要 (教育科学)』第 64 号, pp. 135-149. (2015) 査読無。

<http://hdl.handle.net/10109/12595>

真歩仁しょうん・猪井 新一: “Homeroom Teachers’ Perspectives on Goal Achievement in Japan’s Foreign Language Activity Classes,” 『JES Journal』, Vol. 15, pp. 52-67. (2015) 査読有。

猪井 新一: 「小学校外国語活動において、教師はどのようなときに成功感と失敗感を感じているか」『茨城大学教育実践研

究』第 33 号, pp. 81-95. (2014) 査読無. <http://hdl.handle.net/10109/12050>

猪井 新一・真歩仁しょうん: 「小学校外国語活動は必修化後変化したのか、しないのか」『茨城大学教育実践研究』第 32 号, pp. 81-95. (2013) 査読無。

<http://hdl.handle.net/10109/4731>

[学会発表](計 9 件)

猪井 新一: 「小学校児童が好きな英語授業と嫌いな英語授業の質的分析」言語教育エキスポ 2016, 平成 28 年 3 月 6 日, 早稲田大学早稲田キャンパス (東京都新宿区)

猪井 新一: 「小学校英語の早期化はどのような影響を及ぼすのか」第 15 回小学校英語教育学会広島大会, 平成 27 年 7 月 25 日, 広島大学東広島キャンパス, (広島県東広島市)

猪井 新一: 「小学校外国語活動において学級担任と児童の英語学習態度には関連性はあるのか」言語教育エキスポ 2015, 平成 27 年 3 月 15 日早稲田大学早稲田キャンパス (東京都新宿区)

Inoi, Shinichi: “Do teacher attitudes toward English lessons have an impact on those of students?” The Sixth CLS International Conference, 平成 26 年 12 月 5 日, Centre for Language Studies, National University of Singapore, Singapore

猪井 新一: 「小学校外国語活動における教師の成功感と失敗感をもたらす要因」全国英語教育学会第 40 回徳島研究大会, 平成 26 年 8 月 10 日, 徳島大学常三島キャンパス (総合科学部) (徳島県徳島市)

猪井 新一: 「児童の外国語活動や英語学習意欲はどのような要因によって影響を受けているのか」第 14 回小学校英語教育学会神奈川大会, 平成 26 年 7 月 26 日, 関東学院大学 八景キャンパス (神奈川県横浜市)

猪井 新一: 「小学校教員および中学校教員から見た外国語活動の児童・生徒に及ぼす影響」第 39 回全国英語教育学会北海道研究大会, 平成 25 年 8 月 10 日, 北星学園大学 (北海道札幌市)

猪井 新一, 真歩仁しょうん: 「小学校 ALT の視点から見た「外国語活動」: 全国調査の結果」第 13 回小学校英語教育学会沖縄大会, 平成 25 年 7 月 14 日, 琉球大学 (沖縄県西原町)

猪井 新一: 「ALT 依存型から学級担任型の小学校外国語活動を目指して」第 38 回全国英語教育学会愛知研究大会, 平成 24 年 8 月 5 日, 愛知学院大学日進キャンパス (愛知県日進市)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

猪井 新一 (INOI, Shinichi)
茨城大学・教育学部・教授
研究者番号: 80254887